

パークとマルサスにおける階層秩序と経済循環
「存在の連鎖」および進化論との関連で *

中澤信彦**

私は、この啓蒙の時代にあつてなおあえてつ次のように告白する程に途方もない人間です。即ち、我々は一般に無教育な感情の持ち主であつて、我々の古い偏見を皆捨て去るところいかそれを大いに慈しんでいるのです。(パーク『フランス革命の省察』)

問題設定 反啓蒙と経済学

啓蒙(英 enlightenment; 仏 lumières; 独 Aufklärung)の原義は「(暗黒の世界を)明るく照らす」である。カントは、論文「啓蒙とは何か」において、啓蒙を「人間が自分の未成年状態から抜け出すこと」¹と定義し、偏見・因習・伝統的権威にとらわれずに自分の頭で自由に思考することの重要性を説いた。彼は「宗教における未成年状態こそ最も有害であると同時に最も恥ずべきもの」²と述べている。宗教的迷蒙(暗黒の世界)から人間を解放することが、国・地域によって濃淡の差こそあれ、啓蒙一般の課題であったことは確かである。しかし、このことは正統キリスト教信仰が啓蒙思想と敵対関係にあり教会関係者がおしなべて保守反動勢力であったことを意味するわけではない。神の御言葉を記録した聖書を読み解くように神の御業である「自然という書物」を読み解こうとする「自然神学」の手法³が、ニュートン力学に代表される近代自然科学の形成において導きの糸となったことは、もはや常識の部類に属する⁴。また、英国において奴隷貿易・奴隷制度の廃止運動を主として指導したのは、国教会の福音派とクエーカー教徒であった⁵。つまり、啓蒙思想の展開を(伝統的啓示宗教に代表される)偏見・因習・伝統的権威の解体過程としての

* 本稿は 2004-6 年度科学研究費補助金 基盤研究(A)(1)「近代イングランドとその近隣英語圏における啓蒙思想と経済学形成の関連の研究」(研究代表者: 田中秀夫) および関西大学 2006 年度研修員研究による研究成果の一部である。なお、本稿はこれまでに 4 回の下報告(2004 年 9 月方法論研究会、2004 年 10 月社会思想史学会セッション、2005 年 8 月経済学史研究会、2005 年 12 月日本イギリス哲学会関西西部会)を行なった。多くの方々から有益なコメントを賜った。ここに記して感謝の意を表明したい。

** 関西大学経済学部助教授 e-mail: nakazawa@ipcku.kansai-u.ac.jp

¹ カント [1974] 7 ページ。

² カント [1974] 18 ページ。

³ 鷲津 [2005]。

⁴ ジェイコブ [1990]、寺中 [1998]、ヘンリー [2005] など。

⁵ ボーター [2004] 99 ページ。

み捉えることは正しくない。田中正司の指摘するところによれば、

ヨーロッパの近代思想は、一般的には、キリスト教を理神論的に骨抜きにし、啓示神学を自然宗教化する過程で形成されてきたと解されているが、その実態はキリスト教の理神論化という言葉で括れるほど単純ではない。むしろ、正統キリスト教の啓示宗教的神学思想がバネになって、逆に徹底して近代的な思想の形成・展開が可能になるという側面があった次第が大きく注目される要がある⁶。

そうであるならば、「啓蒙思想と経済学形成の関連」を研究課題とする我々は、伝統的な身分制社会への形而上学的信仰がバネになって逆説的に高度な経済認識「徹底して近代的」な新しい学としての経済学を生み出す可能性についても、検討を進めなければならない。換言すれば、反啓蒙主義の精神と経済学形成との関連について考究しなければならない。そこで本稿では、英国保守主義の父祖パーク彼は社会統合の基盤として国教会制度の堅持を説いたと「二番打者」マルサス彼自身が国教会の牧師であったにおける「存在の連鎖」の観念図式の受容の様相を追跡することによって、両者における政治的保守主義と経済的自由主義との知られざる結合の構造を明らかにしたい。

そもそも「存在の連鎖」とは何か？なぜ「存在の連鎖」が注目に値するのか？ラヴジョイ(Arthur O. Lovejoy, 1873-1962)は、『存在の大いなる連鎖』(1936)において、ヨーロッパ思想史上、プラトン『国家』『ティマイオス』以来の主要な観念図式個人や集団の思考の中に無意識に作用している暗黙の前提や無自覚的な精神的習慣として「存在の連鎖」を抽出し、ヨーロッパの自然・社会認識のあり様を特色づけた。「存在の連鎖」とは、神によって個別に創造されたすべての種(生物・無生物)は、最も高等なもの(天使)から最も下等で原始的なもの(鉱物)にいたるまで、「^{ミッシング・リンク}欠けている環」のない単線的な階層秩序を形成しているとする信念、存在了解、分類学上のシステムのことである⁸。この観念図式は「進化論が登場する直前の18世紀において空前絶後の普及を達成していた」⁹。そして、本来、この観念図式はきわめて保守的な社会観を含意・前提していた。

ロバート・ニスベットは、「存在の連鎖」と保守的な社会観との密接な関連を、次のよ

⁶ 田中 [1993] 5 ページ。傍点の中澤。

⁷ 水田 [1976] 193 ページ。

⁸ 「したがって「存在の連鎖」にあっては、魚と人間のあいだに人魚、鳥とヘビのあいだにバジリスク、といった中間的形態を有する幻獣たちも存在しなけりなかつた。万が一にも、人魚なんぞ伝説の生きものだ、ということになれば、このシステムはもろくも崩壊する。そこで人魚は、当時の博物学の安寧のためにもことさら探したされねばならぬ生物だったのだ。別冊宝島編集部(編) [1990] 30-1 ページ。Lovejoy [1936] p.236(邦訳 250 ページ)も見よ。

⁹ この観念図式のルネサンス期英国における様態については、ティリヤード [1992] を見よ。「欠けている環」は探せば必ず見つかるはず、という強固な信念に突き動かされて、スウェーデンの博物学者リンネ(Carl von Linné, 1707-78)は、自分の弟子たちを世界中に派遣し、標本を送り届けさせた。リンネに典型的に見られるように、18世紀の博物学と言うよりも自然科学全般は、神の秩序そのままの「自然の体系(system of nature)」を見だし、神の偉大さを賛美したい、という宗教的情熱に支えられていた(松永 [1992])。18世紀博物学と「存在の連鎖」との関連については、ロジェ [1992] 第6章も参照せよ。他方、ヴォルテールは「存在の連鎖」をかつてその観念に魅了されたことを告白しているけれども最終的には「御伽噺」「詭弁」として退けた(ヴォルテール [1988] 98-100 ページ)。

うに述べている。

中世における権威はある連鎖、中世神学を支配したあの「存在の連鎖」に似た連鎖によって表明されていた。自由にしても権威にしても、そういったものは個人から家族、教区、教会、国家、そして究極的には神へと列なる集団および結社の連鎖に含まれる必然的な諸相なのであった。このような連鎖もしくは階層制という意味での権威は、保守主義の社会観において中心的な役割を果たした¹⁰。

また、丹治愛は、「存在の連鎖」の観念図式が含意する保守的な階層秩序観について、以下のように述べている。

このような「存在の大いなる連鎖」は...基本的には、神によって創造された不変の存在たちがそのなかでそれぞれの固定した地位を維持しつづけている、永遠に変わることのない静的な秩序としてとらえられていた。...したがって、そこからつぎのような倫理的・政治的帰結が引き出されることにもなる。...人間が宇宙的秩序において自分より上位の存在の属性を求めたり、上位の存在の特徴的な行動を模倣したりするのは、自分よりも下位の段階に下ることと同様に不道徳である...。「存在の連鎖」の考え方が人間社会の内部に適用された場合には、それは社会的階級の存在を是認するイデオロギーともなる...¹¹。

以上のように見てくれば、「存在の連鎖」の観念図式がバークとマルサスの(保守的と目される)社会観にそこはかたない影響を及ぼしているのではないか、という期待を抱くことは、あながち無根拠とは言えないだろう¹²。

バークと「存在の連鎖」との関連については、アイザック・クラムニックの断片的ではあるが先駆的な指摘が知られている。クラムニックはバークを「存在の連鎖を強調する最後の偉大な英国人理論家」¹³と評しているが、「存在の連鎖」とバークの政治的保守主義

¹⁰ ニスベット [1990] 53 ページ。ニスベットは「封建制は存在の連鎖という神学を政治的に読み替えたものである」(ニスベット [1990] 73 ページ)とも述べている。

¹¹ 丹治 [1994] 9-10 ページ。Lovejoy [1936] lecture 6, Dickinson [1977] p.8, Cannon [1994] pp.159-63 も見よ。

¹² このような期待は、英国保守主義の成立に関して、通説的理解とは異なる理解の可能性を含んでいる。通説的理解はフランス革命と産業革命の衝撃を強調する。「近代保守主義の思想と運動とが政治社会における大きな潮流へと成長するためには、革命のイデオロギーが有力な社会集団によって担われ、そして既存の体制に鋭い挑戦をつきつけ、それを根底から動揺させるほどに深刻な危険を示すような事態があらわれるのを必要とする。近代ヨーロッパの歴史において、こうした保守主義の発生要因がはじめて出現したのは、フランス革命と産業革命との衝撃によって既存の政治体制と社会構造と価値体系とが根本的に動揺した 18 世紀末から 19 世紀初頭にかけてであり、まさにこの時代に近代保守主義の父祖エドモンド・バークが思索し、そして「保守主義の宣言」と呼ばれる『フランス革命の省察』が書かれたのである」(勝田 [1969] 168-9 ページ)。しかし、本稿は通説的理解に対して「フランス革命と産業革命の衝撃は触媒にすぎなかったのではないか?」「もっと本質的な何かが啓蒙の 18 世紀を通じて熟成されていたのではないか?」という問いを対置する。

¹³ Kramnick [1977] p.183. 同書 pp.29, 34-38, 83, Kramnick [1990] pp.2-18, 289-95 も参照せよ。

との関連について語っても、彼の経済的自由主義¹⁴との関連について何も語っていない。また、「最後」という表現から伺えるように、「存在の連鎖」の観念図式がいかんにしてパーク以降の思想家(具体的にはマルサス)へ継承されたのかという問題を明示的に取り上げていない。他方、ジェイコブ・ヴァイナーは、「経済的不平等を正当化するために存在の連鎖の教義を使用した18世紀の経済学者として私の見つけたのは、聖職者であると同時に経済学者でもあった、グロスター大聖堂の首席司祭ジョサイア・タッカーだけ(only)である」¹⁵と論じているが、パークの経済思想と「存在の連鎖」との関連への着目は、「だけ」という限定辞の妥当性の問い直しの必要を促す。「経済的不平等を正当化するために存在の連鎖の理論を使用した18世紀の経済学者」としての地位は、タッカーのみならずパークにも与えられうるかもしれない。本稿はコラムニックの指摘を導きの糸としつつ、彼の見解を乗り越える形で、「存在の連鎖」の観念図式がパークとマルサスの社会観および経済認識に及ぼした影響を追跡したい。

パークにおける階層秩序と経済循環

有機的組織としての国家の強調は、パークと彼以後の保守主義政治原理の特徴の一つであるとしばしば論じられるが¹⁶、とりわけパークにおいては、すでに確立している慣習への敬意、自分が帰属している(家族・地域社会・教会などの)媒介的中間集団への愛着パーク自身の用語では「偏見(prejudice)」¹⁷が、個人の内面に道徳性・公共性を育み、それが社会統合の基盤をなす、と考えられている。以下に引用した『フランス革命の省察』(1790)からの一節は、このようなパーク思想の特徴の典型的な表現であるが、ここにはアレクサンダー・ポープ¹⁷『人間論』¹⁸ この哲学詩は、ライプニッツ(Gottfried Wilhelm

¹⁴ パークは、『穀物不足に関する思索と詳論』(1795)において、凶作時においても穀物取引における徹底的なレッセ・フェールを主張した。中澤 [1997] を参照せよ。

¹⁵ Viner [1972] p.92(邦訳124-5 ページ)。

¹⁶ ヴィンセント [1998] 第3章。

¹⁷ Alexander Pope 1688-1744 詩人・批評家。宗教上の理由(カトリック教徒)で正規の教育をほとんど受けず、生来虚弱だったため、独学で古典に親しみ、詩才を伸ばす。技巧を重んずる古典主義詩人で、18世紀英文壇の中心的人物。主要な作品として、『批評論』(*An Essay on Criticism*, 1711)、『髪のマザル』(*The Rape of the Lock*, 1712-4)、『愚人列伝』(*The Dunciad*, 1728, 1742)、『人間論』(*An Essay on Man*, 1733-4)など。他にもイリアス、オデュッセイアの英訳がある。

¹⁸ 『人間論』は、ポーリングブルック卿に宛てられた書簡体の哲学詩で、全体で4つの書簡からなる。完全なタイトルは『人間論 ポーリングブルック卿ヘンリ・セント・ジョン宛の4書簡詩』。人間の性質や状態を、宇宙(第1書簡)・自己(第2書簡)・社会(第3書簡)・倫理(第4書簡)との関係から考察している。

【第1書簡】万物は、いわゆる「存在の大いなる連鎖」として、秩序をなして存在している。その鎖は一つとして欠けるところがなく、全体が一定の秩序をなして並べられている。その連鎖において人間は、神と獣の中間の、中途半端で不完全な位置を占めている。慢心した人間は時としてその本分を忘れて人間以上の存在になろうとするが、そうやって存在の連鎖の外に飛び出そうとすれば、連鎖に欠損が生じて、全体の秩序が一瞬にして崩壊してしまう。つまり、人間の不幸の原因はその高慢さにある。裏を返せば、摂理を信じて既存の秩序に従うことに、人間の義務はあり、幸福もある。

【第2書簡】人間は自愛と理性の二つの原理に支配されている。前者は人間を行動へと駆り立て、後者はその行動の行きすぎを制御する。前者が悪徳の源で後者が美徳の源なのではない。美徳も悪徳もその源は自愛である。悪徳と紙一重の美徳を歪曲させないように保護するのが理性の役目である。

【第3書簡】全宇宙は一つの社会組織である。単独に存在するものは一つもない。すべてが相互に依

Leibniz, 1646-1716)の有名な格言「自然は飛躍しない(Natura non facit saltum)」と並んで、「西洋の思想史全体をほとんどつらぬいているその觀念の、もっとも典型的な表現となりえている」¹⁹と評される の第4書簡からの明白な影響が看取される。

社会の中で自分が属している小さな一劃に愛着を持つこと、その小さな一隊を愛することは、公的愛情の第一の動機(言うなれば萌芽)です。それこそ、我々を導いて、祖国愛からひいては人類愛へと進ませる長い連鎖の最初の輪(the first link in the series)なのです²⁰。

また、『省察』に次ぐパークの主著『新ウィッグから旧ウィッグへの上訴』(1791)には、「存在の連鎖」の世界像 万物は創造者たる神の支配を受け、神が設けた普遍的な階層秩序に属するのであり、あてがわれた地位の本分を守らねばならない が、次のようにはっきりと表明されている。

われわれ人間存在の畏敬すべき創造主は存在の序列(the order of existence)におけるわれわれの場所の創造主である。そして...神聖な策略によって、われわれの意思に従ってではなく彼自身の意思に従って、われわれを配置し、配列させていることによって、彼は、われわれにあてがわれた場所に帰属する役割をわれわれが果た

存しあっている。あらゆる社会的結合の基礎は、人間にも禽獣にも本能として自然に備わっている自愛と社会愛である。愛から真の宗教と統治が生まれるのに対して、恐怖から迷信と暴政が生まれる。

【第4書簡】 第1書簡でも論じられたように、秩序は神の第一法則であり、それゆえ人間に大小、貧富、賢愚のあるのは当然である。しかし、この事実だけを見て人間の禍福を論じてはならない。幸福こそがわれわれ人間の存在の究極の目的であるが、幸福は外面的な利益に依存していない。幸福とは有徳さの報酬なのであって、有徳であるためには、正しく考え善意を持つだけで足りるが、そのために必要な健全な判断力は、身分にかかわりなく、すべての人間に等しく与えられている。善行は常に神の酬いを受ける。幸福でありたいという願望は、他者を助ける最も強い動機と結びついている。個人の見いだす幸福で、多かれ少なかれ、人類全体の方向をもたないものはない。というのも、真の自愛と真の社会愛とは同一であるからだ。

¹⁹ 丹治 [1994] 8 ページ。Lovejoy [1936] lecture 2, 6, 7 も見よ。

²⁰ WSB, VIII, pp.97-8(パーク [1978] 60 ページ)。()による挿入はパーク。『人間論』第4書簡には以下のような一節が見られる。PPP, pp.156-7(ポウブ [1950] 107 ページ)。

神はまず全体を愛して、部分に及ぶが、人間の心は
God loves from Whole to Parts: but human soul
まず個を愛して、全体に高まらねばならない。
Must rise from Individual to the Whole.
自愛は有徳の心を覚醒するのに役だつのだ。
Self-love but serves the virtuous mind to wake,
例えるならば小さな石が静かな池に落ちて、
As the small pebble stirs the peaceful lake;
まず中心が動き、一つの狭い輪がそれに続き、
The centre mov'd, a circle strait succeeds,
幾つもの輪が次第に広がるのに似ている。
Another still, and still another spreads,
友人、両親、隣人をまず抱擁し、
Friend, parent, neighbour, first it will embrace,
ついで祖国を、続いて全人類を。
His country next, and next all human race,

すよう現に定め給うたわけである。われわれが広く全人類に負う義務は、断じて或る特定の随意協約(any special voluntary pact)の産物ではない。それは人間と人間との間の、そして人間と神の関係に由来し、そしてこの関係は決して選択の産物ではない²¹。

バジル・ウィリーは、この一節を引用しつつ、「パークは、誰しも認めるようにはるかに優れた歴史感覚と一段と強化された想像力をもってであるが、[ポープ『人間論』の] 「何にもあれ存在するものはすべて是なり」という見地へ立ち戻っているかにみえる」²²と論じており、クラムニックはこの一節をもって「神聖なる存在の連鎖とその不変で断固とした階層的な理想をパークが最も明確かつ明瞭に表明したもの」²³と評している。次の『穀物不足に関する思索と詳論』(1795)からの一節には、このようなパークの階層秩序観がより詳細に表明されている。農業経営者は、

かれの^{トレード}仕事に用いられるすべての道具のうち、人間の労働 古代の著述家たちが有声の道具(*instrumentum vocale*)とよんだものは、資本から^{キャピタル}償還^{リペイメント}をえようとするとき、もっとも信頼できるものである。他の二種類の道具、すなわち古代の分類で半声の道具(*semivocale*)とよばれているもの 使役用家畜 と無声の道具(*instrumentum mutum*) 荷車・スキ・スコップなど は、すべてそれ自体とるにたらないものというわけではないが、効用ないし経費の点で、くらべものにならないくらい劣っている。それらは、第一の道具が一定量存在しなければ、無にひとしい。というのは、なにごとにもよらずあらゆるもののうち、^{マインド}精神がもっとも価値があり、もっとも重要であるからである。これを基準にするならば、農業はその全体が自然の正しい秩序(a natural and just order)にしたがっている。家畜は、スキや荷車にとって、動因となる原理(an informing principle)である。労働者は家畜にとって^{リーズン}理性である。農業経営者は、^{レイバラ}労働者にとって、考え指示する原理(a thinking and presiding principle)である。この従属の連鎖(chain of subordination)をたち切る試みは、それがどの部分の切断を目指すにせよ、ひとしく不合理である...²⁴。

実はここには「存在の連鎖」の観念図式の秘められた二面性が表面化している。この観念図式が本来前提としたのは万物間の歴然たる静的な階層秩序であって、人間を獣より上位に、天使より下位に位置づけるものであった。しかし同時に、この観念図式は、連鎖に切れ目がなく人間と動物とを区別する境界線は極度に曖昧だということも含意していた。「獣は理性を持たない」とは考えられず、「獣も(人間の理性よりも劣るけれども)ある種

²¹ FR, p.160(パーク [2000] 655 ページ)。

²² ウィリー [1975] 275 ページ。[]による挿入は中澤。

²³ Kramnick [1977] p.35.

²⁴ WSB, IX, p.125(パーク [1957] 251 ページ)。「repayment」は「利潤」ではなく「償還」と改訳した。

の理性を持つ」と考えられた²⁵。ポーブ『人間論』が、「自然状態」で「人間は獣とともに歩き、木陰を分かち合った」²⁶と詠じているのも、こうした「境界線の曖昧さ」の端的な表明として理解されるべきであろう。それゆえにこそ、農業経営者が農業労働者にとって「考え指示する原理」であり、農業労働者が家畜にとって「理性」であるのと同様に、家畜は農具にとっての「動因となる原理」であるとされる。しかし、パークは「農具は家畜に仕えるために造られており、家畜は農業労働者に仕えるために、農業労働者は農業経営者に仕えるために造られている」と主張しているわけではない。「存在の連鎖の全部の環」は「他の環のためにではなく、それ自身のために、もっと正確には形態の連続が完結するために存在する」²⁷。つまり、被造物はすべて全体の秩序(後述)の維持のために存在している、というのがパークの本懐である。ともあれ、パークの考えにおいては、自然は本質的に不平等であり、あらゆるものの位置・序列が理性の有無・多寡によってあらかじめ定められており、《農業経営者 農業労働者 家畜 農具》という序列は「自然の正しい秩序」であり、「この従属の連鎖をたち切る試みは...不合理」である、ということになる²⁸。

ここでパークは、農業経営者と農業労働者との関係が支配・従属関係であることを、「存在の連鎖」の観念図式に依拠して認めつつも、それが支配・従属関係であるゆえに「自然の正しい秩序」である、という一見逆説的な結論を導いている。それはパークが支配・従属関係という表層の内奥に互恵的で相補的な関係 「隷属なしの従属(subordination without subservience)」²⁹ を見ているからである。同じく『穀物不足に関する思索と詳論』からの引用。

農業労働者の生産物によって、農業経営者が十分な利潤(incoming profit)を得ることが、農業労働者の第一かつ基本的な利益である。...恵み深く賢明な万物の配置者は、人々が彼ら自身の利己的な利益を追求するに際して、彼らが意図しているかどうかにかかわらず、一般的利益を彼ら自身の個人的成功と結びつけざるをえなくさせる³⁰。...しかし、もし農業経営者が貪欲すぎればどうか？ 事態はますます良いのだ。彼は、自分の収益を増やそうと望めば望むほど、自分の収益の主たる源泉に他ならない労働の提供者たちの条件を良くすることに、それだけますます関心を

²⁵ トマス [1989] 182 ページ。

²⁶ PPP, pp.142(ポーブ [1950] 69 ページ)。

²⁷ Lovejoy [1936] p.186(邦訳 194 ページ)。

²⁸ マクファースン [1988] の訳者解説(151 ページ)。

²⁹ 「なるほど従属は不可欠であったがそれは隷属なしの従属であった。我々が見た通り、どんな被造物の存在も単に梯子の上で上位にあるものの幸福のための手段ではなかった。各々は独立の存在理由を持っていた。結局はどれも皆同じく重要であった。それゆえ各々は上位のものより尊敬と思いやりを受ける権利と、自分自身の生活を送ったり、その地位にふさわしい「権利と心づけ(privileges and perquisites)」を得たり、機能を果たしたりするのに必要であろうものすべてを所有する権利を持っていた」(Lovejoy [1936] p.207(邦訳 218-9 ページ))。ラヴジョイは無自覚であろうが、ここには「存在の連鎖」と貧民の「モラル・エコノミー」との密接な関連が示唆されている。モラル・エコノミーについては、Thompson [1991] ch.4, 近藤 [1993]、音無 [1998]、中澤 [1999] などを参照のこと。

³⁰ スミスの「見えざる手」を髣髴とさせる一文。

寄せるのである³¹。

支配・従属関係こそが人間社会全体の秩序と道徳性と経済的繁栄の源泉である。卑小な人間の理性だけをもってしては理解できないだろうが、神はそのように世界をデザインした。このようなパークの社会観は、『省察』の次の一節において、いっそう明確に表明されている。

すべて繁栄している共同社会においては、生産者の生活を直接支えるに足る以上の幾分かが生産されています。この剰余は土地資本家(landed capitalist)の所得となっています。それは労働することの無い所有者によって費消されるわけですが、しかし、この怠惰はそれ自身労働の源泉であり、この休息はそれ自身^{インダストリ}勤勉に対する拍車なのです。国家にとっては唯一の関心事は、土地から地代として取られた^{キャピタル}資本が、その出発点たる勤勉に再び還ることであり、またその費消が、費消する人々、及びその還流先たる民衆の道徳性をできるだけ損なわないことです。

…修道士は怠惰であると言われます。そうかも知れません。彼らは聖歌隊で歌わせる以外に使い途が無いかもしれせん。それでも彼らは、歌いも語りもしない人間共と同程度には有益に使われている訳ですし、舞台の上で歌う人間と比較してさえ同じ程有益に使われています。彼らはまるで、早暁から夕闇に到るまで、奴隷的で屈辱的で薄汚くて非人間的でしかも屢々健康に極めて有害で病気になるような無数の仕事

社会のエコノミー(social oeconomy)故に多くの気の毒な人々が不可避免的に運命づけられている仕事 をしているのと同じように、有益に使われているのです。もしも、事物の自然の成り行き(the natural course of things)を妨げたり、また、奇妙に操られているこれら不幸な民衆の労働が廻す循環の大輪(the great wheel of circulation)をどの程度にもせよ妨げたりすることが、世の中にとって有害でさえなければ、私は、修道院の静寂な休息を荒々しく乱すよりは、彼ら民衆を悲惨な勤勞から強制してでも救出する方に限りなく傾くでしょう。…ともあれ、この[土地の剰余生産物の]分配という目的のためであれば、修道士の無駄な出費も、我々世俗の不労人間の無為な出費と同程度には、旨く目的に適っていると私には思われるのです³²。

ここでパークは、革命政府が教会(修道士)を攻撃したために連鎖の一部分に欠損が生じてしまい、全体の秩序が崩壊してしまったことを、強い憤りをもって告発している³³。注

³¹ *WSB*, IX, p.125(パーク [1957] 251-2 ページ)。

³² *WSB*, VIII, pp.209-10(パーク [1978] 201 ページ)。[]による挿入は中澤。「social oeconomy」は「社会組織」ではなく「社会のエコノミー」と改訳した。

³³ 『人間論』第4書簡には以下のような一節が見られる。*PPP*, pp.128-9(ポープ [1950] 30-1 ページ)。
存在の大いなる連鎖！ それは神より始まり、
Vast chain of being, which from God began,
天上、地上、天使、人間、
Natures aethereal, human, angel, man
獣、鳥、魚、虫、目に見えぬもの、

目すべきは、クラムニックは指摘していないけれども、この場合の秩序が「階層秩序」としてのみならず「経済秩序」としても、しかも「秩序」が「循環」と同一視される形で、把握されていることである。旧制度フランスにおける修道士は、その「怠惰」「無駄な消費」が民衆の勤労の駆動力として機能することによって、経済循環の重要な一部分を占めていた。次節で明らかにされるように、こうした認識はマルサスに継承される。のに、革命政府の暴力が修道士を除去したために循環が断ち切られてしまい、それが現在のフランスの経済的苦境の一因となっている、というのがパークのフランス革命批判の経済学的根拠なのである。

ここで用いられている‘social **oeconomy**’という表現と‘the **natural** course of things’という表現にも注目したい。我々は両者から「自然のエコノミー(economy of nature)」という表現を連想する。この表現は、ダーウィン『種の起源』に頻出する「自然のエコノミーにおける場所(places in economy of nature)」という表現によって有名であるが、もともとは1658年にイングランドのディグビー卿(Sir Kenelm Digby, 1603-65)が初めて用いたとされ、リンネの論文『自然のエコノミー』(1749)によって普及した。当時「エコノミー」という言葉は、現在と同じ「経済」「儉約」という意味のほかに、「神の摂理」「[生命プロセスの]合理性」という意味でも用いられており、両者には「無駄のなさ」という共通の含意がある。この論文の題名のエコノミーは後者の意味である。すべての生物は相互に関連していて、一つとして不要なものがない。草食動物の産む子供の数が多いのは、肉食動物に捕食されるからで、それによって自然の平衡が保たれている。すべては神の英知による、とリンネは説いている。この論文は欧米で広く読まれ、生態学の源流の一つとなった。ラテン語で書かれているが、1759年には英訳も出版されている³⁴。パークがリンネの論文を読んだのかどうかは定かではない。しかし、「多くの気の毒な人々」が「奴隷的で屈辱的で薄汚くて非人間的でしかも屢々健康に極めて有害で病気になるような無数の仕事」に従事することを「不可避免的に運命づけられている」ことが「有益」であり‘social oeconomy’であるとするパークの叙述には、「社会のエコノミー」を「自然の

Beast, bird, fish, insect! what no eye can see,
望遠鏡のとどかぬもの、無限から汝へ、
No glass can reach! from Infinite to thee,
汝から無へと続く　より優れたものに
From thee to Nothing!　On superior pow'rs
我々が迫れば、より劣ったものが我々に迫る。
Were we to press, inferior might on ours:
さもないと、被造物全体の中に間隙が生じて、
Or in the full creation leave a void,
階段の一段が折れても、大いなる階段は崩れ落ちよう。

Where, one step broken, the great scale's destroy'd:

『人間論』はボーリングブルック思想の韻文化と評されているだけあって、ボーリングブルック自身も「全体の秩序」への信仰を以下のように力強い言葉で表現している。「この地球の繊細な住民は、劇中人物(the *dramatis personae*)のように、様々な性格を持ち、各場面で様々な目的の演技を割り振られている。物質世界の様々な部分は、劇場の舞台仕掛けのように、演じる者のためではなく演技のためにこしらえてあるのだ。そして劇全体の秩序やまとまりは、もしそのいずれか一つでも変更を加えられると、駄目になってしまうであろう」(WB, IV, p.363)。パークはボーリングブルックをその宗教思想(理神論)ゆえに生涯にわたって嫌悪したが、その階層秩序観において両者の間にはかなりの親近性が見られる。

³⁴ 以上、荒俣 [1982] 198-9 ページ、松永 [1992] 131 ページ、松永 [2000] 50 ページ。

エコノミー」に引き寄せて捉えようとする思考様式が、はっきりと見て取れる³⁵。パークの有機体的な社会観が「存在の連鎖」のコロラリーであることは、これ以上の説明を要しないであろう。

パークの経済思想は、その徹底したレッセ・フェールの主唱においては自由主義的だが、
‘the natural course of things’ という表現はヒュームやスミスを彷彿とさせる、
修道士といった封建勢力をその経済的機能において 経済循環の駆動力として 擁護する保守的側面も有していた。パークは、「存在の連鎖」の観念図式の枠内に留まりながらも、その図式内に資本や勤労や消費といった経済学的語彙を流入させ定位させることによって、経済的自由主義と政治的保守主義とを結合したのである。その思想の総体を「保守的自由主義」と呼ぶことに異論はないであろう³⁶。

マルサスにおける階層秩序と経済循環

マルサスはパークが先鞭をつけた階層秩序の経済学的擁護論を継承し変容・発展させた。修道士と地主との違いはあるけれども、マルサスはパークと本質的に同じロジック 経済循環の駆動力としての(修道士/地主の)奢侈的消費 を採用している。

経済学者としてのマルサスの主著『経済学原理』(1820)によれば、生産力を高める原因は、資本の蓄積、土壌の肥沃度、労働を節約する発明などであるが、生産力の発展に比例して富が継続的に創造されていくためには、生産を刺激する高い市場価格(および利潤)を実現させるような、適切な有効需要が存在しなければならない。パークの言葉を借用するならば、資本家に継続的な資本蓄積を「指示する原理」としての有効需要者が存在しなければならない。生産物の市場価値を高める需要側の要因としては、土地財産の分割、国内商業と外国貿易などがあるが、マルサスがもっとも重視するのは地主の不生産的消費である。その不生産的消費者の集団の中では「疑いなく地主が先頭に立っている」³⁷。マルサスは、高地代[=地主の利益]を国の富と力の指標と見なしたし³⁸、穀物法による穀物の高価格が地主にもたらす地代こそ工業製品に対する有効需要になるとして穀物法を擁護した。パークが修道士を経済循環の駆動力という経済的機能において擁護したのと同様に、マルサスもまた地主を経済循環の駆動力として擁護した。

また、パークは、「多くの気の毒な人々」が「早暁から夕闇に到るまで、奴隷的で屈辱的で薄汚くて非人間的でしかも屡々健康に極めて有害で病気になりそうな無数の仕事」に従事することを(神によって)「不可避免的に運命づけられている」と考えたが、マルサスも貧しい労働階級が「自然(神)の法則」ゆえに不可避に存在すると考えている。「野蛮状態

³⁵ 鷲津浩子は‘economy of nature’に「自然の有機統統一」(鷲津 [2005] 276 ページ)という訳語を与えているが、的確な選択であるように思われる。

³⁶ 「反啓蒙主義的自由主義」と呼ぶことも可能かもしれないが、パークは(後に見るマルサスも)啓蒙主義的な進歩観を全面的に退けているわけではないから、「保守的自由主義」のほうがより妥当な名称であろう。

³⁷ *PPE* I, p.466, 475(マルサス [1968] 下、329、341 ページ)。

³⁸ 農業上の改良が進んでいる文明国ほど地代は増大するから「地主の利益ほど国家の富および力と密接かつ必然的に関連しているものはない」。 *PPE* I, p.225(マルサス [1968] 上、333 ページ)。

をすぎた社会なら、どこにでも、財産家の階級と労働者の階級とがなくてはならぬ」³⁹とマルサスは断言している。彼は後者の前者への従属の不可避性を、「存在の梯子」の比喩を用いて以下のようにも表現している。怠惰で不用意な人々は、

当然の報いとして社会階梯(the scale of society)のどん底にいたのであり、もしわれわれが彼らをこの位置から引き上げるならば、われわれは慈悲の目的を明らかに損なうだけでなく、彼らの上に位置している人々に対して紛れもない不正⁴⁰を働いたことになる⁴¹。

このように、パークとマルサスの階層秩序観は、かなりの親近性を示している。もっとも、両者の間には無視できない差異もまた存在する。マルサスにおいて「存在の連鎖」の観念図式はパークにおいてほど明瞭に検出できない。マルサスの描く階層秩序は動物・植物・無生物を欠いており、「存在の連鎖」の観念図式としては相当に不完全なものである。それ以上に重要なのは、マルサスが擁護に努める階層秩序は、パークの静的なそれと比べると⁴²、はるかに動的である。それが端的に表されているのが、マルサスの中流[層]階級肥大化論⁴³である。彼の中流階級肥大化への展望は、デビュー作である『人口論』初版(1798)においても、晩年に刊行された『人口論』最終版である第6版(1826)においても、本質的に変わっていない。

我々は、社会から富裕や貧困を除去することをおそらく期待できないが、そういう極端な層にある人々の数を減らし、中層にある人々の数を増やすような統治様式を発見できるならば、それを採用するのは、当然にわれわれの義務である。といっても、樞の場合でも根や葉を著しく小さくすれば幹の栄養の循環が弱くなる恐れが多くなるのと同じく、社会においても極端な層をある程度以上は減らせることはできない。なぜならば、中層の澁刺たる努力が、そのために減退するからであり、それこそが知識の発達にとって一ばんに大切な原因であるからである。もしも、人間に、社会における上昇への希望や下落への恐怖がないならば、もしも勤勉であっても報いがなく、怠けていても罰がないならば、中層は確かに今ある状態と違っているだろう⁴⁴。

³⁹ *WM*, I, pp.101-2(マルサス [1935] 171 ページ)。

⁴⁰ マルサスがそれを「不正」と見なすのは、臣民の特定の階級の利益を、他の階級の利益を促進するだけの目的で侵害するからである。マルサスの念頭にあるのは、救貧法のような大規模な公的慈善である。中澤 [2003a] [2003b] を参照のこと。

⁴¹ *EPP*, II, p.162(マルサス [1985] 608-9 ページ)。[]による挿入は中澤。

⁴² 厳密に言えば、パークが擁護に努めた階層秩序もまったく固定的なわけではない。パーク自身、中流階級の出身であり、自助努力によって上流階級に入っていた。彼の「本性上の貴族階級(natural aristocracy)」の内容を仔細に検討すれば、彼が有能な中流階級と無能な貴族階級との間での緩やかな移動(前者の上昇と後者の没落)を認めていたこと、より正確には、上流階級の優位性と有徳さを保つためにはそれが不可欠であると考えていたことが理解できるだろう。中澤 [2006] を参照のこと。

⁴³ 柳田 [1998] が最初に最初に参照されるべき有力な先行研究である。

⁴⁴ *WM*, I, pp.128-9(マルサス [1935] 209-10 ページ)。中澤の判断で部分的に改訳をほどこした。

初版で以上のように述べるマルサスは第 6 版でも以下のように述べている。

社会の中層は、有徳で勤勉な習慣によって、またあらゆる種類の才能の発達にとってもっとも有利であることが一般に知られている。しかし、すべての人々が中層に属しえないことは明白である。上層と下層が道理上は絶対に必要であるし、また必要であるだけでなく、いちじるしく有益でもある。もし何人も社会において栄達することを望みえず、あるいは零落する心配もないならば、もし勤勉がその報酬を、そして怠惰がその懲罰をもたらさないならば、今日一般的繁栄の原動力をなしているわれわれの境遇改善への盛んな活動を見ることは期待できないであろう。しかしヨーロッパ諸国を考えてみると、われわれは上層、中層および下層の総体的割合にきわめて大きな相違のあることに気づく。そしてこうした相違の結果から見て、人間社会の大多数の幸福を増進するもっとも根拠の確かな期待は、中層の総体的割合が高まる見通しにかかっている。...もしも社会の最下層階級(the lowest classes)がこのようにして減少し、中層階級(the middle classes)が増加するならば...社会の幸福の総計は明らかに増大するだろう⁴⁵。

人口法則がもたらす貧困への恐怖は、人間が知識を発達させるための刺激として役立っているのであって、そこに神の叡智をマルサスは見ている。

罪悪がこの世にあるのは、人をして失望させるためではない、活動せしめんがためである。われわれは何をくるしんでそれに屈しよう、よろしくそれをとりのけたらいい。各自は、身にふりかかる罪悪を自分からだけではなく、自分の力の及ぶ範囲から掃いのける努力をすることが、彼自身の利益であり、また彼の義務でもある。そして彼がこの義務を果し、ますます賢明にこの努力の方向を定め、そしてますますこの努力が成功するならば、彼は、ますます彼の精神を啓発し向上させることができるであろう。そしてこれにより彼は、ますますよく神のみ心を成就しているということになるであろう⁴⁶。

富者と貧者という階層区分は、それが自然法則(人口法則)にもとづいており、自然法則(人口法則)を定めたのが神である以上、究極的には神が定めたものである。したがって、貧富の格差を完全に消滅させることは不可能であるし、それを期待するのは神の意思に反している。しかし、同時に、マルサスは、社会の最下層階級の人々を減らし中流階級を増加させるような政策　ただし経済循環の駆動力としての地主階級の没落は阻止されねばならない　の発見と採用を、神に対する「われわれの義務」だと考えている。「誰かが没落しない限り、誰も上昇できない」という考えをマルサスは退ける。この場合、神は階層区分の漸進的な流動化を望んでいる、ということになる。漸進的な中流階級の肥大化

⁴⁵ *EPP*, II, pp.194-5(マルサス [1985] 644 ページ). 中澤の判断で部分的に改訳をほどこした。

⁴⁶ *WM*, I, p.137(マルサス [1935] 223 ページ).

は神の計画の実現であると考えられている。ここにおいて(かつては固定的に捉えられていた)階層区分が時間の経過とともに少しずつ流動化していくという思想が明確に打ち出されている。この点こそがパークの階層秩序観とマルサスのそれとの最も重要な差異である。

このようなマルサスの流動的な階層秩序観の歴史的背景をラヴジョイの記述に即して探るならば、「存在の連鎖」の観念図式が18世紀から19世紀にかけて被ったとされる変容 時間化 を指摘することができるだろう。もともと無時間的で静的な秩序を表現していた「存在の連鎖」の観念図式は、種と種のあいだの無数の「欠けている環」というアポリアを克服しようとする過程で、啓蒙時代の「進歩」「発展」の思想の影響を受けて、歴史の中で順次実現されていくものへと修正された。「存在の連鎖は、今見るところでは完全ではないが、もし我々が過去、現在、未来にわたって、形態の全系列を知ることができたとすれば、完全であると、またはより完全になる傾向がある」⁴⁷。秩序の種を蒔いたのは神だが、その発芽には時間がかかる。時間を通じて神の計画が実現される、というわけである。これが「存在の連鎖」の「時間化」である。ここにいたって、生物の多様性は静的にではなく動的に解釈されるようになる。しかし、この萌芽的な進化論は、生物進化を枝分かれ的な性質のものであるとするダーウィニズムとは根本的に異なる、自然界の調和的展開に関する思弁的で目的論的な説明であった。ダーウィニズムにおいては、一つの枝が他の枝よりすぐれているという含みはない。進化は目的をもたない偶然のプロセスである。しかし、このようなダーウィンの進化モデルは、目的論的な発展のメカニズムを信奉するヴィクトリア時代の人々の目には、すべてを偶然へと還元してしまう道徳観念を欠いたもの、キリスト教と矛盾するものとして映った。スペンサー哲学がダーウィニズムにラマルク(Jean-Baptiste Pierre Antoine de Monet, Chevalier de Lamarck, 1744- 1829)的な解釈をほどこしたことで ラマルクの学説によれば、生物は内在する力によって自ずからより複雑で高等なものへと時間をかけて変化するが、その経路はすべての時空間で同じであって、その意味で、生物の進化の過程は直線的・目的論的である、ようやくヴィクトリア時代の人々はダーウィニズムを受容することができた。ダーウィニズムの潜在的な可能性が十全に認識されたのは、ようやく20世紀の初めであった⁴⁸。このように「存在の連鎖」の観念図式は、近代進化論(ダーウィニズム)の形成母体としての側面を有しながらも、それ以上に、その普及を拒む有力な先行パラダイムであった⁴⁹。

⁴⁷ Lovejoy [1936] p.255(邦訳 271 ページ)。存在の連鎖の時間化については、鷲津 [2005] 165-193 ページが簡便なガイドである。

⁴⁸ 松永 [1988] 第1・8章、池田 [1997] 66-82 ページ、ボウラー [1995]。

⁴⁹ 「ダーウィンの進化論の特徴は、下等から高等へ直線的に進歩するという「存在の連鎖の観念」からの切断にある。廣松他(編) [1998] 1026 ページ(執筆者は斎藤光)。日本で「進化」と言えば「エボリューション」の訳語であるが、これはもともとダーウィンではなくスペンサー(Herbert Spencer, 1820-1903)が使用して普及させた語である。「スペンサー以前にも、生物進化の意味でエボリューションを用いた例がないわけではなかったが、ごく少なかった。一般的には「トランスミューション(転成)」の語が用いられていた。ダーウィンは『種の起源』(1859)で「変化を伴う由来」という表現を用い、エボリューションは一度も用いていない。スペンサー哲学が広まるにつれてエボリューションの語も普及していった。ダーウィンも『種の起源』第6版(1872)では、加筆部分にエボリューションを用いている。エボリューションという語には、目標を目指して進歩する、という意味あいからみついている。この

時間の経過(富の累進的増進)とともに、下層階級の一部は、自身の境遇を改善したいという意欲に突き動かされて、一定の熟練と勤労を体得するようになり、中流階級へと上昇転化し、結果的に中流階級が肥大化してゆく、というマルサスのヴィジョンは、彼らに境遇改善への意欲をもたらしているのが(神の定めた)人口法則であることを考慮すれば、ラマルク流の目的論的進化論のヴィジョンと本質的に同じ論理構造を持っていることになる。マルサスの有効需要論(階層秩序の経済学的擁護論)のみならず、その中流階級肥大化論もまた、「存在の連鎖」の観念図式のコロラリーであることは、もはや明らかであろう。

マルサスは、そのフランス革命批判によって、反啓蒙あるいは保守の陣営に帰属させられることが多かった。しかし、同時に彼は、下位の存在は努力によって上位の存在へと昇ることができる、という啓蒙主義的・進歩主義的なヴィジョンの信奉者でもあった。そうしたヴィジョンは、彼の自然神学思想の反映であったかもしれないが、彼がスミスの開明的な経済思想を学習した成果でもあつたであろう⁵⁰。そこに、時間化された「存在の連鎖」の観念図式が作用することによって、パークとはやや趣きの異なる独自の保守的自由主義が生み出された、と暫定的に結論できるのではないだろうか。

結びにかえて

「存在の連鎖」の観念図式は、パークとマルサスの社会観および経済認識に、決して小さくないインスピレーションを与えてきた。本節では、より広く経済思想史全体の視野からこの観念図式の問題性と可能性を素描することによって、本稿の結びにかえたい。

第一に、「キリスト教経済学(Christian Political Economy)」⁵¹の系譜との関連に注目したい。18世紀末から19世紀前半にかけて、自然神学と経済学の調停を試みた、マルサス、ペイリー、サムナー、コップルストン、ホェイトリー、チャーマーズといった一群のアングリカン聖職者の経済学の系譜が知られている。その系譜をA・M・C・ウォーターマンは「キリスト教経済学」と名づけた。聖職者ではないパークは「キリスト教経済学」者のリストから漏れているが、彼が「存在の連鎖」の伝統を受容しつつその経済学的読み替えを試みた事実は、彼を「キリスト教経済学」の系譜の前史上に位置づけることを可能にするだろう⁵²。

第二に、「キリスト教経済学」以後の「存在の連鎖」についても、検討の余地があるだろう。ウォーターマンの「キリスト教経済学」の系譜は1833年で終わっている。しかし、ヴィクトリア時代人が目的論的思考に執着していたこと、そのためにダーウィンの非目的論的な進化論の内容が正しく理解されるようになったのは20世紀に入ってからであることを考慮すれば、「存在の連鎖」は1833年以降も人々の依然として経済認識の基本的枠組みを提供したのではないだろうか。ここで我々はマーシャル『経済学原理』の扉にライ

ようなやっかいな言葉が、種の「変化」を意味するものとして生物学に導入され、進化にかかわる議論を混乱させる一因になった。』松永 [1987] 148 ページ。

⁵⁰ 根岸 [1997] 第4章、中澤 [2003b] を参照のこと。

⁵¹ Waterman [1991].

⁵² この点については、中澤 [1997] の注9 および 18 で示唆しておいた。

ブニッツの有名な格言「自然は飛躍しない」が記されていたことを想起する。この格言はマーシャル経済学の方法論的特質の一端「連続性」を表している、とされている。橋本昭一によれば、「彼は進化論的発想から、あるいはドイツ観念論哲学の世界から、「連続性の原理」という概念を取り出し、みずからの経済学の標語として選んだ。これは古典派にたいする尊敬心を失わないままに、同時に新しい時代の課題を労働者階級の生活改善とみなし、静学的ミクロ経済学と動学的マクロ経済学とを結びつけるために彼が用意した連結環であった」⁵³。この橋本の主張は、「存在の連鎖」の観念図式がマーシャル経済学に与えたインスピレーションの可能性の一端を示唆しているように思われる。ライプニッツとポープを出発点にして、経済思想としての「存在の連鎖」の概念史を、《パーク-マルサス-マーシャル》という系譜でたどることも可能だろう⁵⁴。そのことによって、《マルサス-ケインズ》の系譜の相対化も図られるだろう。

第三に、『人口論』の改訂の意義に対して新たな光が投げかけられているように思われる。マルサス自身はニュートン主義者を自認し、人口原理が「自然の書物」を「深い注意を以って、実験を繰り返して」読んだ結果得られた理論であると自負している⁵⁵。『人口論』は、第2版以降、初版にあった神学を論ずる結び2章が削除され、人口原理を例証するための歴史的・統計的データが大幅に追加されていった。しかし、佐々木憲介が指摘するように、「マルサスの人口の原理は、すべての現象を説明することができ、どの現象によって反証されない、という性格」を有している。「現実の人口の状態がどのようなものであっても、積極的制限および予防的制限が異なった程度で作用しているものとして説明できるので、すべての事例がいずれかの制限を例証するものになる。…国民の生活水準が向上し、生存手段に対する人口の圧力が感じられなくなっても…それは、予防的制限が強力に作用しているということを示すにすぎない」。マルサス人口理論のこのような性格は、「予測の反証可能性を科学の基準とみなす反証主義の立場からすれば、許しがたい反証逃れの態度に見える」⁵⁶。しかし、見方を変えれば、「いかなるものにもそれなりの場所と意義を与えられる」という「存在の連鎖」の観念図式(あるいはそのコロラリーとしての神義論・楽天主義・悪の起原の説明⁵⁷)に従った説明と理解できないだろうか？ また、18世紀の博物学が自然を通して神の御業である「自然という書物」を読み解こうする自然神学の体裁をとっていた以上、歴史的・統計的データの拡充はマルサスにおける博物学的欲望の現われであり、神学2章の削除とは同じコイン(自然神学)の表の裏の関係にあったと理解できないだろうか？ こうした理解は、『人口論』第2版の改訂をめぐるドナルド・ウィンチの理解「マルサスが「以前の神義論にみられた神学的功利主義という極印を捨て、より非宗教的な社会学者になった」と考えることは「間違い」であり、「キリ

⁵³ 橋本 [1993] 18 ページ。

⁵⁴ 《マルサス-マーシャル》の系譜をめぐる興味深い先行研究として、マーシャルの「生活の標準」概念をマルサスの「愉楽の標準」概念の継承と見なす柳田 [1998] 第9章がある。

⁵⁵ *WM*, I, p.59 (マルサス [1935] 106 ページ)。

⁵⁶ 佐々木 [2001] 69 ページ。

⁵⁷ Lovejoy [1936] lecture 7.

スト教的道徳哲学者マルサスと[社会]科学者マルサスとの間に対立はない」⁵⁸ と整合的であり、それを側面補強しているように思われる。

「存在の連鎖」の思想空間は問題性と可能性に満ちている。

参考文献一覧

- WSB: The Writings and Speeches of Edmund Burke*, 9 vols., Oxford U. P., 1981-.
- FR: Edmund Burke, Further Reflections on the Revolution in France*, Liberty Fund, 1992.
- WM: The Works of Thomas Robert Malthus*, 8 vols., William Pickering, 1986.
- PPE: T. R. Malthus, Principles of Political Economy*, 2 vols., Cambridge U. P., 1989.
- EPP: T. R. Malthus, An Essay on the Principle of Population*, 2 vols., Cambridge U. P., 1989.
- WB: The Works of Lord Bolingbroke*, 4 vols., University Press of the Pacific Honolulu, 2001.
- PPP: Poetry and Prose of Alexander Pope*, Riverside Editions, 1969.
- Cannon, John [1994] *Samuel Johnson and the Politics of Hanoverian England*, Oxford U. P.
- Dickinson, H. T. [1977] *Liberty and Property: Political Ideology in Eighteenth-Century Britain*, Homes and Meier Publishers. 田中秀夫監訳『自由と所有 英国の自由な国制はいかにして創出されたか』ナカニシヤ出版、2006年。
- Kramnick, Isaac [1977] *The Rage of Edmund Burke: Portrait of An Ambivalent Conservative*, Basic Books.
- Kramnick, Isaac [1990] *Republicanism and Bourgeois Radicalism: Political Ideology in Late Eighteenth-Century England and America*, Cornell U. P.
- Lovejoy, Arthur O. [1936] *The Great Chain of Being*, Harvard U. P. 内藤健二訳『存在の大いなる連鎖』晶文社、1975年。
- Thompson, E. P. [1991] *Customs in Common*, The Merlin Press.
- Viner, Jacob [1972] *The Role of Providence in the Social Order: An Essay in Intellectual History*, The American Philosophical Society, 1972. 根岸隆・根岸愛子訳『キリスト教と経済思想』有斐閣、1980年。
- Waterman, A. M. C. [1991] *Revolution, Economics & Religion: Christian Political Economy 1798-1833*, Cambridge U. P.
- 荒俣宏 [1982] 『大博物学時代』工作舎。
- 池田清彦 [1997] 『さよならダーウィニズム 構造主義進化論講義』講談社選書メチエ。
- ウィリー, バジル [1975] 『十八世紀の自然思想』(三田博雄他訳)みすず書房。
- ヴィンセント, アンドルー [1998] 『現代の政治イデオロギー』(重森臣広訳)昭和堂。
- ウィンチ, D. [1992] 『マルサス』(久保芳和・橋本比登志訳)日本経済評論社。

⁵⁸ ウィンチ [1992] 59 ページ。挿入は訳者(久保・橋本)。

- ヴォルテール [1988] 『哲学辞典』(高橋安光訳)法政大学出版局。
- 音無通宏 [1998] 「モラル・エコノミーとポリティカル・エコノミー」、『経済学史学会年報』第 36 号。
- 勝田吉太郎 [1969] 「パーク 近代保守主義のイデオロギー」、『勝田吉太郎・山崎時彦編『政治思想史入門』有斐閣、第 7 章。
- カント [1974] 『啓蒙とは何か』(篠田秀雄訳)岩波文庫。
- 近藤和彦 [1993] 『民のモラル 近世イギリスの文化と社会』山川出版社。
- 佐々木憲介 [2001] 『経済学方法論の形成 理論と現実の相剋 1776-1875』北海道大学図書刊行会。
- ジェイコブ, マーガレット [1990] 『ニュートン主義とイギリス革命』(中島秀人訳)学術書房。
- 田中正司 [1993] 『アダム・スミスの自然神学 啓蒙の社会科学の形成母体』御茶の水書房。
- 丹治愛 [1994] 『神を殺した男 ダーウィン革命と世紀末』講談社選書メチエ。
- ティリヤード, E. M. W. [1992] 『エリザベス朝の世界像』(磯田光一・玉泉八州男・清水徹郎訳)筑摩書房。
- 寺中平治 [1998] 「近代科学の成立と宗教」、『鎌井敏和・泉谷周三郎・寺中平治編『イギリス思想の流れ 宗教・哲学・科学を中心として』北樹出版、第 3 章
- トマス, キース [1989] 『人間と自然界 近代イギリスにおける自然観の変遷』(山内昶監訳)法政大学出版局。
- 中澤信彦 [1997] 「エドモンド・パークの救貧思想 マルサス・初版『人口論』の時代」、『マルサス学会年報』第 7 号。
- 中澤信彦 [1999] 「「モラル・エコノミー」とアダム・スミス研究」、『関西大学経済論集』(関西大学経済学会)第 48 巻第 4 号。
- 中澤信彦 [2003a] 「フォックス派ウィッグとしてのマルサス」、『永井義雄・柳田芳伸・中澤信彦編『マルサス理論の歴史的形成』昭和堂、第 4 章。
- 中澤信彦 [2003b] 「初版『人口論』におけるスミス 救貧法批判の方法論的基礎」、『関西大学経済論集』第 53 巻第 2 号。
- 中澤信彦 [2006] 「政治家の条件 エドモンド・パークとシヴィック・ヒューマニズム」、『田中秀夫・山脇直司編『共和主義の思想空間 シヴィック・ヒューマニズムの可能性』名古屋大学出版会、第 4 章。
- ニスベット, ロバート [1990] 『保守主義 夢と現実』(富沢克・谷川昌幸訳)昭和堂。
- 根岸隆 [1997] 『経済学の歴史〔第 2 版〕』東洋経済新報社。
- パーク, エドモンド [1957] 「穀物不足に関する思索と詳論」(永井義雄訳)、『世界大思想全集 11 パーク』河出書房。
- パーク, エドモンド [1969] 「自然社会の擁護」(水田珠枝訳)、『水田洋責任編集『世界の名著 34 パーク マルサス』中央公論社。
- パーク, エドモンド [1978] 『フランス革命の省察』(半澤孝磨訳)みすず書房。
- パーク, エドモンド [2000] 『パーク政治経済論集』(中野好之編訳)法政大学出版局。
- 橋本昭一 [1993] 「マーシャルと古典派経済学」、『井上琢智・坂口正志編『マーシャルと同時代の経済学』ミネルヴァ書房、第 1 章。

- 廣松渉他(編) [1998] 『岩波 哲学・思想事典』岩波書店。
- 別冊宝島編集部(編) [1990] 『進化論を愉しむ本』JICC 出版局。
- ヘンリー, ジョン [2005] 『一七世紀科学革命』(東慎一郎訳)岩波書店。
- ポウブ [1950] 『人間論』(上田勤訳)岩波文庫。
- ポウラー, ピーター [1995] 『進歩の発明 ヴィクトリア時代の歴史意識』(岡崎修訳)平凡社。
- ポーター, ロイ [2004] 『啓蒙主義』(見市雅俊訳)岩波書店。
- マクファースン, C. B. [1988] 『パーク 資本主義と保守主義』(谷川昌幸訳)御茶の水書房。
- 松永俊男 [1987] 『ダーウィンをめぐる人々』朝日選書。
- 松永俊男 [1988] 『近代進化論の成り立ち ダーウィンから現代まで』創元社。
- 松永俊男 [1992] 『博物学の欲望 リンネと時代精神』講談社現代新書。
- マルサス [1935] 『初版 人口の原理』(高野岩三郎・大内兵衛訳)岩波文庫。
- マルサス [1968] 『経済学原理(全2巻)』(小林時三郎訳)岩波文庫。
- マルサス [1985] 『人口の原理〔第6版〕』(大淵寛他訳)中央大学出版部。
- 水田洋 [1976] 『近代思想の展開』新評論。
- 柳田芳伸 [1998] 『マルサス勤労階級論の展開』昭和堂。
- ロジェ, ジャック [1992] 『大博物学者ビュフォン 18世紀フランスの変貌する自然観と科学・文化誌』(ベカエール直美訳)工作舎。
- 鷲津浩子 [2005] 『時の娘たち』南雲堂。